

禪と東洋文化

久松 眞 一

一

禪は本來、凡ての人間の眞實の根本主體の自覺であつて、そこには東洋と西洋との別のあるべきものではない。この主體に於ては、西洋人も東洋人も本來同一であるべきである。しかし根本主體であるからとて、この主體は凡ての人間に自覺されて居るとは限らない。もとよりこの主體が自覺されて居るといふことは、單に能所的に主體が識られて居るといふことではなくして、主體そのものが自らめざめて主體的に生きて居るといふことであるが、この主體がめざめて生きて居るといふことなくしては禪は現成しない。禪は東洋に於て現成し、東洋に於て廣く遠く傳承せられ、東洋に於て種々のはたらきを演じ、西洋に於ては見ることできぬ独自の文化を東洋に創出せしめ、東洋と西洋とを文化的に類別する一つの主要なる契機となつた。從來東洋人のみならず西洋人によつても、禪は屢々東洋文化と西洋文化とを類別する主要な契機となされたが、實にもしも東洋に於て禪が現成し傳承せられなかつたならば、今日東洋文化として特に西洋文化から著しく特色づけられ居

る東洋文化のいかに多くが東洋から削減されることであらうか。

東洋に於ける禪の現成は宗教、學問、道徳、藝術等の文化の全面に互つて、西洋に於ては到底見ることのできない獨自なる一大文化體系を東洋に成立せしめた。宗教としては、神的聖なるものを超越的に外に向つて求めず、人間本來の内在的自性を聖なるものとし、直下にそれへ還元歸入することを宗とする禪宗、學問としては、この直下還元によつて、現實の思惟理性の絶對根源たる絶對矛盾を絶對止揚し、そこに頓悟する絶對智に基づいて一切を統一する禪哲學ともいふべきものを始め、それによつて儒教を解釋し深化したる宋學の如きもの、道徳としては、禪僧や、武士や、諸道の達人の生死を越え、是非を絶し、寂然として不動無畏なる境涯、無我にして自他を絶し、無念無心にして住まるところなく、所謂「放心」にして「主一無適」なる無礙自在のはたらき、藝術としては、底ひなき深さ静けさ、幽玄さ、男性的なる勁さ太さ、ものにこだはらぬ洒脱さ、世間ばなれした脱俗さ、燦爛華麗細微均齊を碎いたさびわび簡素さ枯高さといふやうなものを渾一的に表現して居る南宋畫及びその流れを汲む日本畫の諸派、禪家の書蹟、造庭、能樂、抹茶道の諸藝術、禪文學、俳諧等は内容的意味的にも、歴史的にも禪に起因する一大文化體系の主要なる中核的要素である。なほこれ等の影響を受けたる末流末派のものや、これ等と類似なものを數へ來れば東洋文化の實に廣汎なる領域に互るであらう。この文化體系は、支那に於ては、禪の歴史的發祥時代である梁

隋、唐に起り始め、禪の最も盛んであつた宋時代に最も興隆して頂點に達し、日本に於ては、禪の渡來した鎌倉時代に始まり、禪の全盛期であつた南北朝、室町、桃山、江戸の各時代に亙つて最も隆昌を極め、支那に於ては見ることでできなかつたやうな諸種の文化が創出されて全體系の大成を見るに至つた。しかし禪にいかなる契機があつて、かくも特色ある一大文化體系を東洋に創出するに至らしめたであらうか。私は茲にその意味的根本契機を究明して見ようと思ふ。

二

抑この東洋獨自の一大文化體系を創出せしめた禪とはいかなるものであらうか。それが明かになれば、それによつてかかる文化と禪との必然的內面的意味關係が明かになり、かかる文化の本質的意味も自ら理解される筈である。禪とはいかなるものであるかといふ問に對しては、方法的にも內容的にも種々の答へ方があり得るのであるが、私は今茲では概念的方法によつて先づ大體「禪とは人間の根本主體の自覺である」と簡單に答へて置いて、この命題の意味内容を解説することによつて禪の概要を描き出し、且描き出しながらそれによつて東洋文化との關係を解明してゆかうと思ふ。もとより禪に就ての概念的認識は禪そのものではないから、これを得て禪そのものを體得したと思ふならば大なる思ひ違ひといはねばならぬが、たとひ概念的認識と雖も學問的にも求道的にもその

正確が期せられなければならぬことはいふまでもない。

凡そ人間にして自覺のないやうな人間はないであらう。自覺があつたならば勿論主體が自覺されて居る筈である。主體とはどんなものであるかをたとひ概念的學問的に把握し、はつきりといひあらはし得ないにしても、例へば誰しも自分が茶を喫して居る場合に、他人が喫して居るのではなくして自分が喫して居るのであるといふことをよく承知して居るのは、主體の自覺があるからである。精神喪失者が何かでなかつたならば人間にして主體の自覺のないものはないであらう。然らば主體を自覺して居ることは禪に限らない筈である。しかし人間が通常自覺して居る主體は枝末主體であつて根本主體ではない。枝末主體を主體として居るのが人間の現實である。人間は枝末主體として生き、それで考へ、それで行ふものに過ぎない。枝末主體は多元的であつて互に相限定し相矛盾するものである。もとよりいかなる主體も主體である以上何等か統一がなければならぬから、枝末主體と雖も主體として何等か一つの統一體であるのは相違ないが、その統一體は對他的であつて、他を限定するとともに他から限定されて居る統一體である。かゝる統一體は内に對しては統一的でありながら他に對しては矛盾を持ち、矛盾を持つことに於て更に統一を豫期し求める統一體であるから、統一體でありながら而も矛盾體であるといはなければならぬ。人間の主體がかゝる主體である限り、人間は永遠に統一即矛盾、矛盾即統一體たるを免れない。こゝに人間の時間性歴史性がある。

人間が矛盾より統一へ、統一から矛盾へ、現實から理想へ、理想から現實へ、苦から樂へ、樂から苦へ時間的に無限に轉成するのは枝末主體を主體とする人間の必然的運命である。所謂辨證法は單に吾々の思辨的論理的の知的方法ではなくして、枝末主體の主體的生命的な方法でなければならぬ。單に知的の辨證法はこの主體的辨證法に基づくものに過ぎない。辨證法は單に知的のものではなくして、枝末主體の在り方生き方の具體的法則である。西洋の辨證法的哲學は、枝末主體が自分自身のこの具體的法則を自己認識したものに外ならない。辨證法的哲學者は、自分自身の主體である枝末主體の實態に洞徹し、そこにはたらいて居る辨證法的法則を把握した概念者に過ぎない。かくて辨證法は枝末主體の自己法則であるから、枝末主體が時間的歴史的存在であり、歴史が辨證法的であつて、歴史哲學が辨證法的哲學と密接な關係を持つのは當然なことゝいはなければならぬ。

辨證法的哲學者は、枝末主體が自分の主體であり、人間一般の主體も枝末主體であると考へて居るものであるから、人間を辨證法的に觀じ歴史的に觀するものである。その限り彼等には、絶對統一性、完結性、永遠性は人間の世界に於て現成し得べくもない。而もこれ等は、彼等の究極の目的でなければならぬ。現成しなければならぬこの究極の目的が絶對に現成し得べくもないといふことは、矛盾があつてはならない哲學の重大缺陷であるのみならず、かく哲學せしむるに至つた哲學者の主體自身の重大苦悶でもなければならぬ。尤も哲學者は、哲學のこの重大缺陷を、絶對統一の

妥當の必然性を唯抽象的論理的に論結することによつて補ひ、彼自身の重大苦悶を、絶対統一は現成すべきものであり、現成させなければならぬものであり、事實上現成するものであるとの情意的信仰によつて自ら慰めようとし、或はこれを現成せしめる超人間的力を信することによつて自ら安んじようとする。しかし、さればとて絶対統一は即今現成して居らないことはもとより、未來永劫絶対に現成すべくもない。こゝに辨證法的哲學の絶対に濟ふべからざる致命的難點がある。この難點を濟ふために抽象論理に陥り、情意的信仰に墮する如きは、辨證法的哲學の如きに於ては殊に許すべからざることである。しかし、西洋の辨證法的哲學に限らず、凡そ枝末主體を主體とし、人間を枝末主體的に觀じてゆくものは、人間を歴史的に觀じ、辨證法的に觀じてゆくものであつて必然的にこの難點を免れることはできない。基督教の如きも、人間の力を批判し、人間には絶対統一を現成せしめる如き力の全然無きことを自覺し、辨證法の難點に撞着はしたが、なほも枝末主體を主體とし、絶対統一は他者的な超人間的力によつて現成するものと信するものに過ぎないから、絶対統一の現成は單に信仰内容に止まる外はない。尤も超人間的力による絶対統一の現成を信することは、絶望に對する光明であり慰安であり、生命を力づけるものではあるが、超人間的力は單なる信仰内容に過ぎない限り、絶対統一を事實的に現成し得るものではない。基督教に限らず佛教に於てさへも、人間を枝末主體的に觀するために、人間を歴史的辨證法的に觀じ、時間的に無限の未來に

絶對統一を現成せんとて、或はそれを自ら現成することの不可能なるを自覺し、超人間的力によつて現成しようとする考方もしくは信仰もあるが、これも人間を枝末主體的に觀する限り、畢竟辨證法や基督教と同じ難關に逢着するの外はない。それであるから佛教は本來、人間を枝末主體的に觀せずして、根本主體的に觀することによつて枝末主體そのものを絶對解消し、かゝる難關の因つて來る根源を斷たうとするものである。枝末主體を主體とせずして、却つて枝末主體を絶對解消して根本主體に還元歸入し、根本主體を主體とするところに辨證法や基督教と佛教との本質的相違がある。基督教は人間の絶對無力を自覺し、人間の一切を神に絶對歸依するといふが、この神は佛教の眞佛即ち根本主體とは内容的に異なるものであり、又神への絶對歸依も枝末主體の絶對解消ではなくして、なほ枝末主體を主體とする立場を脱しない。佛教に於ても淨土教の如きは、この點基督教と外觀を同じうするが、淨土教も枝末主體を絶對解消して根本主體を主體とすることをその根柢に假定して居るものである限り佛教的であるといふことができる。もしどこまでも枝末主體を主體とするならば佛教ではない。禪は枝末主體を絶對解消し、根本主體を主體とすることに於て最も徹底したものである。禪は根本主體の如實現成である。この根本主體の如實現成こそ、禪並に禪的文化を西洋文化から異つた獨自のものたらしめ、佛教中に於ても佛教中の佛教として異色あらしめる。所以のものである。枝末主體を絶對解消して根本主體に還元歸入し根本主體が如實現成することが禪的宗

教であり、枝末主體の上に成立つ論理ではなくして、枝末主體を絶對解消し根本主體の上に成立つ論理の自覺が禪的哲學ともいふべきものであり、根本主體の行爲が禪的道徳であり、根本主體の感情が禪的藝術である。根本主體の如實現成なくしてはこれ等は凡て成立たない。